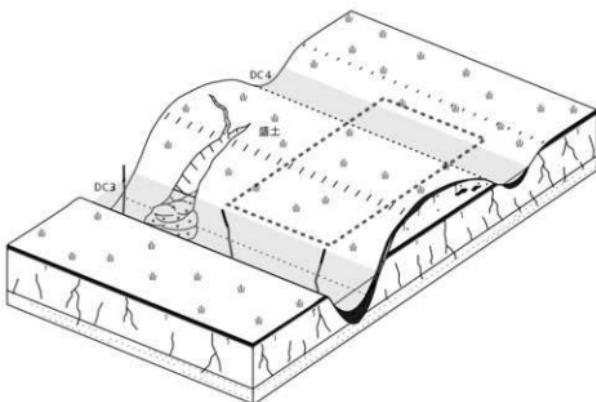


送水管布設工事に伴う

鬼虎川遺跡第57次発掘調査報告書



2004.3

財団法人東大阪市文化財協会

例　言

- 1 本書は、東大阪市西石切町～弥生町で実施した送水管布設工事に伴う鬼虎川遺跡第57次発掘調査の報告書である。
- 2 調査は大阪府水道企業(管理者　末吉　徹氏)より委託を受け、東大阪市の指導に基づき財団法人東大阪市文化財協会が実施した。
- 3 調査にかかる費用は大阪府水道企業が負担した。
- 4 現地調査および遺物整理作業は2003年7月15日から2004年3月31日にかけて断続的に実施した。
- 5 現地調査および本書の作成は別所秀高(財団法人東大阪市文化財協会)が担当した。各項にとくに明記していない限り本文の執筆は別所が行った。
- 6 本調査に適用した水準高は東京湾平均潮位、座標は旧測地系の第VI系平面直角座標である。
- 7 附録のCD-ROMには本書のPDF(Adobe[®] Portable Document Format)ファイルと本書で使用した写真と同一のカラー写真集を収録した。閲覧にはAdobe[®] Reader[®] およびHTMLブラウザが必要です。
- 8 本調査にあたり財団法人東大阪市文化財協会の職員をはじめ、東大阪市教育委員会の若松博恵氏から既成果や遺跡形成に関する様々な教示を得た。また、大阪府水道企業ならびに大勝建設株式会社、安西工業株式会社からは現地で多大な尽力を得た。これら関係者各位に感謝いたします。

目　次

第1章　調査の方法と経過	1
第2章　鬼虎川遺跡周辺史と既調査成果、生駒山西麓の地形	1
第3章　調査成果	3
3.1. 57-7 調査区の堆積層と出土遺物	3
3.2. 57-2 調査区の成果	5
3.2.1. 堆積層	5
3.2.2. 遺構と遺物	7
3.2.3. 放射性炭素年代測定(1)	14
3.2.4. 放射性炭素年代測定(2)	14
3.3. 57-3 調査区の堆積層と出土遺物	16
参考文献	20

* 表紙の絵は57-2,3区で検出した第IV 遺構面を立体模式図として復元したもの。

第1章 はじめに

本事業にかかる調査地は被服団地前交差点付近の国道170号線（大阪外環状線）沿いに点在する（図1）。大阪府水道企業は同国道の歩道部分に送水管布設を計画し、布設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地に該当するため発掘調査を実施することになった。ただし、歩道部分の大半は一般国道170号線西石切立体交差事業に先行して発掘調査が完了していたことから（菅原ほか2000, 菅原ほか2002）、從前の調査の掘削深度より深く、調査が未完の地点および調査が実施されていない15地点が調査の対象となった。調査は大阪府水道企業から示された工事計画と進捗に従って、57-7区、57-2区、57-3区、57-9区、57-10区の順に着手し、各調査地点の調査方法は東大阪市の指導に基づいた。

57-7区は約9.6m²（φ 3.5m）の到達立坑で、標高約3.1~0.9mを調査対象とし、約50cmごとの人力掘削とライナーブレートの設置を繰り返した。2003年7月15日に調査に着手し、同18日に標高約1mに達したところで隣接するガス管を移設するための中断期間を挟んで、同9月10日に再開、同19日に完了した。

57-2区は約33m²（4.5× 6.8m）の立坑で、標高約1.4~0.6mを調査対象とし、その間を人力掘削した。2003年7月15日に調査に着手し、同8月5日に完了した。

57-3区は約46m²（5.6× 8.3m）の立坑で、標高約1.4~0.6mを調査対象とし、約50cmごとの掘削とライナープレートの設置を繰り返した。2003年11月17日に調査に着手し、同27日に完了した。

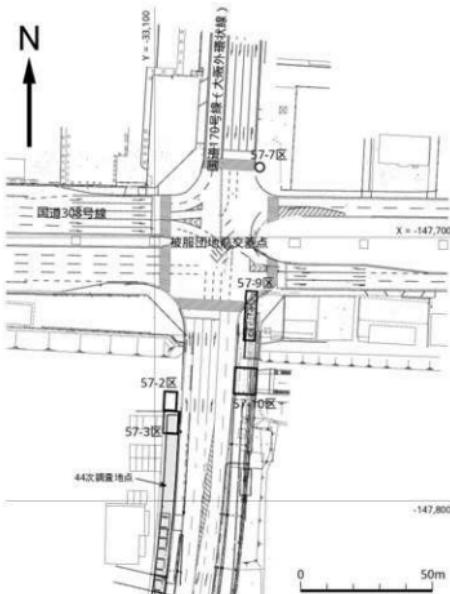
57-9区は約84m²（4.4× 19.0m）の立坑で標高約4.2~1.3mが調査対象であるが、本体工事が夜間に行われることから、東大阪市の指導に基づいて当該深度まで1mごとに機械掘削した土砂を仮置き場へ搬出し、そこで遺物を探集する方法が採られた。2004年1月26日に土砂を仮置き場での遺物の探集を行った。

57-10区は約90m²（8.6× 10.6m）の立坑で、標高約4.7~0.8mを調査対象とし、その間を人力掘削した。ただし、本調査区は從前の調査地と重複していることが認めわかっており、立坑東壁沿いの幅約1.8m、北壁沿いの幅約1.2mのみが調査対象になった。2004年3月3日に調査に着手し、同3月18日に完了した。

以上の調査のなかでは、遺物・遺構検出を試み、遺構分布図や堆積層断面図および柱状図を作成し、記録を採った。また、必要に応じて微化石分析用の土壤サンプルや放射性炭素年代測定供試料を採取した。これらの現地調査と共に並行し、出土遺物や現地で記録した各図面の整理作業を行い、2004年3月31日に本事業をすべて完了した。

第2章 鬼虎川遺跡周辺史と既調査成果、生駒山西麓の地形

鬼虎川遺跡は生駒山西麓の扇状地扇端から低地部にかけて拡がり（図2）、現地表面の標高は4~10mである。鬼虎川遺跡東側の生駒山地は最高峰の生駒山を中心に班欽岩体が分布し、その周りを花崗岩が取り巻いていることが知られている（例えば日本の地質「近畿地方」編集委員会編1987、生駒山地領家帯研究グループ1986など）。いわゆる「生駒西麓産」と呼ばれる角閃石を多量に含む胎土をもつ土器は、この生駒山班れい岩に含まれる角閃石が起源であると考えられる。生駒山地の西縁には南北方向に発達する生駒断層があり（前田1966）、その西側には階状扇状地が発達し、さらにその西側で低地が広がる。下川ほか（1997）によれば、生駒断層は東大阪市善根寺のトレーニング調査では約1.4万年前以降に1回の断層活動があったこと、四条畷市清瀧のトレーニング調査では2000~1200年前の



間に最新の断層活動があったことを指摘している。

寒川・宮地(2001)は辻子谷谷口付近に点在する古期扇状地面の形成年代を8~13万年前とした。また、その西侧に発達する扇状地面の形成年代を2~3万年前としているが、空中写真の判読と考古遺跡で得られた考古遺物年代から周辺の扇状地を5面に分けることができ、低所から高所に向かって完新統最上部扇状地面、完新統中・上位扇状地面、更新統最上部扇状地面、完新統下部扇状地面、更新統下部扇状地面の順に配されている。このうち鬼虎川遺跡は扇尖付近から低地部にかけて舌状に張り出した完新統最上部扇状地面と更新統最上部扇状地面、低地面にかけて拡がっている。今回の調査地点は低地面の後背湿地に位置し、周辺の地下表層は最終氷期の湖沼成泥層や縄文海進期の海成泥層、後背湿地で形成された泥層からなる。

いっぽう、鬼虎川遺跡第25, 29・30, 32, 33次調査では縄文海進最盛期頃に形成された海岸が検出された(下村1988, 勝田・曾我1994, 才原・藤城1996)。この崖はおおむね現在の標高6m下、新期扇状地下位面と低地面の境界付近に埋没しており、6mの等高線に沿ってみられる現在の段差は海食崖の名残と考えられる。

これまでの鬼虎川遺跡やその周辺遺跡の調査では、縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけて現在の国道170号線より西側の鬼虎川遺跡から水走遺跡の範囲にかけて貝塚が点在していること、弥生時代中期には遺跡地南東部で居住域があり、墓域が国道170号線の東側に点在していたこと、中期末には墓域はより東側に拡大し西ノ辻遺跡や植附遺跡の範囲にまでおよぶこと、さらに弥生時代後期には居住域が近鉄東大阪線新石切駅付近の西ノ辻・植附・神並遺跡の範囲に移されたことが明らかになった。このような低所から高所への生活域の移動は、当時河内平野に広がっていた「河内湖」(梶山・市原1972)の湖水面の相対的な上昇(地学団体研究会大阪支部編著1999)と密接にかかわっていると考えられる。

弥生時代後期以降、鬼虎川遺跡や水走遺跡の範囲は河内湖湖底あるいは後背湿地の環境に変化したが、山側から供給される土砂によって徐々に埋積され、古墳時代中期頃には再び陸化した。鬼虎川遺跡第26次(宮崎ほか1995)や第33次調査地点(才原・藤城1996)では、5世紀中頃の竪穴住居跡や須恵器・土師器などが検出された。同時期

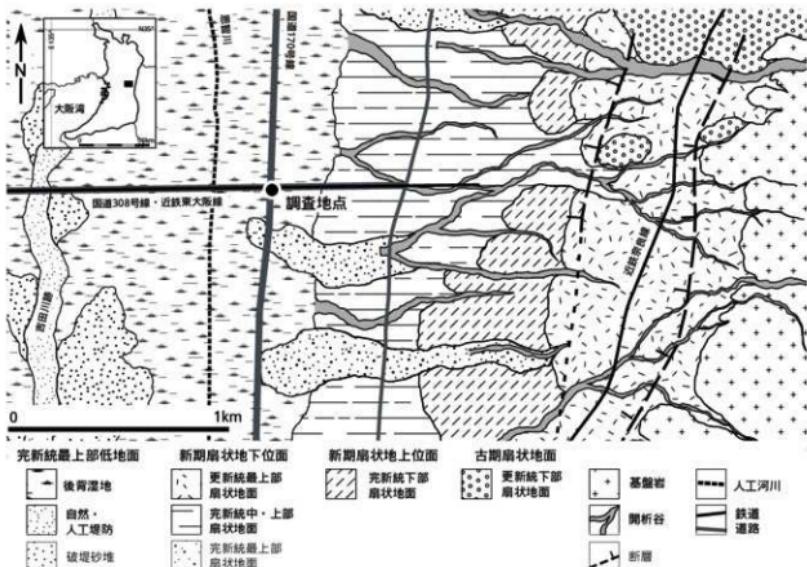


図2 鬼虎川遺跡周辺の地形分類と表層地質

の集落は東側の西ノ辻・植附・神並遺跡でも展開されたようで、製鉄遺構や滑石製品の工房跡、水利遺構、畑の耕作地跡などが見つかっており、周辺一帯は在地の集団とは異なる技術体系をもった朝鮮半島の伽耶あるいは百濟系の渡来人の集落であったと考えられる。

平安時代末から室町時代前半にかけては、国道 308 号線沿いで井戸や配石遺構、遺跡範囲北縁部で井路や畑の耕作地跡などが検出されている。第26次調査では井戸から「蘇民将来...」と書かれた護符が出土した（宮崎ほか 1995）。隣接する植附遺跡や西ノ辻遺跡でも「蘇民将来...」と記された護符や人形（ひとがた）が検出されていることから、周辺は呪いを司る集団と密接にかかわっていたことがうかがえる。

6世紀から11世紀および15世紀から17世紀にかけても、鬼虎川遺跡周辺

は地下水位が上界にともなって湿地化した。このことによって居住地としては不適になり、周辺では水田や畑が営まれるようになる。いっぽうではより高所に位置する西ノ辻・神並・植附あるいは鬼塚遺跡では比較的継続して集落が営まれている。現在ではこれらの湿地を人工的に埋め立てて鉄道や国道、有料道路、ビル、工場などの建築物が立ち並んでいるが、今日でもに開発から取り残された僅かな田地ではひとたび大雨が降ると部分的に冠水し、水がけはない状態が幾日か続く。縄文時代以降、鬼虎川遺跡周辺は人間と水（とくに地下水）とのせめぎ合いの場であったと言えよう。



図3 東大阪市北東部に分布する遺跡

第3章 調査成果

3.1. 57-7 調査区の堆積層と出土遺物

57-7 区は約 9.6m² (φ 3.5m) の到達立坑で、標高約 3 ~ -0.9m が調査対象である。本調査区の東側には既設のガス管が通っていることがあらかじめ判っていたが、調査区のどの範囲まで過去の掘削が及んでいるのかは明らかでなかった。このため 3 段目ライナーブレート（標高 3m 下限）を設置するための掘削時に慎重に平面を精査し、この範囲を確認したところ、調査区のほぼ東半部がすでに破壊されていることが判った（図4）。既破壊部は綿まりの悪い粗い砂が充填しており、湧水に対して非常に弱く崩落が著しかったこと、実質的な平面調査が可能な範囲が狭小であることから、調査は平面での遺構の拓がりの確認をせず、堆積層の記載と遺物採取にとどめた。

本調査区の堆積層は下位より、干潟の砂泥互層、干潟後背地の泥層、堤間湿地の泥層、流路を充填する砂層、人工流路（井路）を充填する泥層と粘土、さらに人工流路を充填する泥層、現代の盛土が累重する（図6）。

(1)は塊状をなす砂層で、ごく最近の茶碗やビニール片、針金、まれに泥質の偽礫などが含まれていた。大阪外環状線（国道 170 号線）建設時の盛土と判断される。

(2)は灰色を呈する無層理の細�混じり粘土質シルトである。静水域の堆積環境を示すが、周辺の調査地点では(2)

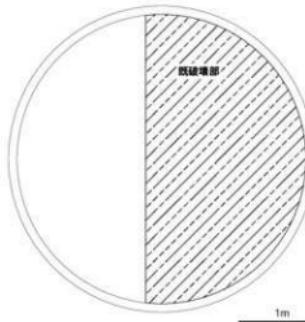


図4 57-7区の既破壊部



図5 57-7区の調査風景

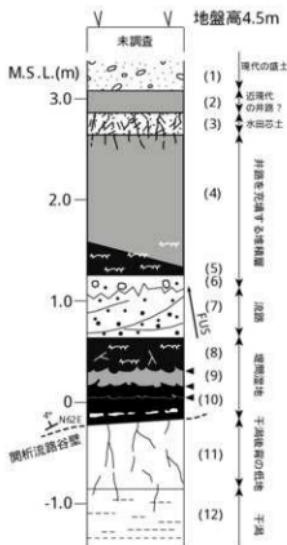


図6 57-7区の堆積層柱状図

が分布する標高3m付近には近代～現代の水田作土層やこれにともなう井路が検出されていることから、当該期の井路を充填する堆積層と考えられる。出土遺物はみられない。

(3)は塊状をなし、巨視的には直径1～2cmの偽礫を含む泥質砂である。細かな炭や植物遺体を多く含む。イネの根跡と考えられる幅1mm程度の根跡が(3)上限より下位にかけてよく発達している。これらの特徴から(3)は水田の芯土と考えられ、上位の井路が造成された時にこの芯土に対応する作土や芯土の上部が削平されたと理解される。(3)からは土師器、須恵器、瓦器、磁器の細片、瓦破片が出土し、最新遺物は近世の瓦である。

(4)は暗緑灰色を呈する無層理の粘土質シルトで下位ほど有機物を多く含む。わずかに土師器や瓦器の細片が出土した。(5)は茶褐色を呈し、植物遺体細片を非常に多く含む無層理の粘土質シルトである。出土遺物はみられない。(6)は暗緑灰色を呈する塊状の砂質泥層で、新鮮な偽礫を多く含む。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、磁器の細片、瓦破片が出土した。(6)と(7)の層界には顕著な凹凸がみられ、(6)に偽礫が含まれることから人為的に掘削されたことが伺える。また、(4)～(6)間の最新遺物は(6)から出土した近世の瓦である。これらのことから(4)～(6)の累重は、周辺の調査地点で検出されている堀上田の井路(松田1997, 池崎・藤城2000, 松田2000)を充填した堆積層と考えられる。ここでは浚渫や掘り直しの痕跡が認められなかった。(5)から(4)にかけては有機物の含有量が減ることから、井路内の水深が徐々に増していったことがわかる。

(7)は緑灰色を呈し、トラフ型斜交層理をなす細礫・細粒砂である。出土遺物はみられない。

(8)は茶褐色を呈し、粘土質シルトの基質をもち植物遺体や材化石を非常に多く含む亜泥炭層である。出土遺物はみられないが、河内平野全域にわたって分布する弥生時代後期ないしは弥生時代後期～古墳時代初頭の亜泥炭層に対比される。

(9)は暗灰色を呈し、わずかに砂が混じる無層理の粘土質シルトである。出土遺物はみられない。

(10)は黒色を呈する無層理の粘土質シルトである。詳細な時期を特定できないが、わずかに弥生土器の破片が出土した。(10)下半には層厚3～4cmの灰白色シルトが断裂しつつも水平方向に分布していることが観察される。(10)の走向はN62°E、傾斜は4°NNWで、(11)を不整合に覆う。このような特徴は後述する57-2区や同3区でもみられ、被服團地前交差点付近で確認できる。これまでに東大阪市宮ノ下遺跡第1,2,4次調査地点(別所1996a, 別所1996b)や鬼虎川遺跡第7次調査地点(芋本・松田1984)、水走遺跡第3,8,9次調査地点(若松・阿部1997, 原田ほか1998)で確認されている沖積上部砂層を開析した浅い谷(開析流路)が分布している可能性がある。

(11)は灰白色を呈する無層理の極細粒砂～粘土で、下部にはわずかに細粒砂～極細粒砂の葉層がみられ、下位層(12)より漸移している。根跡が顕著にみられる。出土遺物はみられない。

(12)は緑灰色を呈する粘土質シルトと細粒砂～極細粒砂の葉層の互層からなり、根跡がみられる。出土遺物はみられない。



図7 57-7区標高0m付近の堆積層断面



図8 57-7区人力掘削下限

3.2. 57-2調査区の成果

57-2区は約33m²(4.5m×6.8m)の立坑で、標高約1.4~-0.6mが調査対象である。地盤高6.3mより1.4mまでの堆積層を機会掘削で除去し、それ以下、-0.6mまでの堆積層を人力で掘削した。

3.2.1. 堆積層

(1)は暗緑灰色を呈し、塊状をなす泥質砂である。偽礫が多数みられる。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器の細片、瓦の破片が含まれていた。後述する井路の埋め戻し土と考えられる。

(2)は灰色を呈し、塊状をなす僅かに砂が混じる粘土質シルトである。下には偽礫や(2)堆積途中に人為的に攪拌された痕跡がみられる。土師器、須恵器、瓦器の細片、瓦の破片が含まれていた。

(2)と下位層準の層界には顯著な凹凸が認められ、(2)下限は北から南にかけて緩やかに高度を増す。(2)下面は人為的に掘削された溝(CN1)の加工面(第I造構面)であり、(2)は(1)とともにそれを充填する堆積層をなす。本調査区内ではCN1の両岸堀方を検出していない。CN1は堀上田に伴う比較的規模が大きい井路と考えられる。なお、(2)下面ではCN1のほかにDC1を検出した。

(3)は黄灰色~灰色を呈する無層理の粘土質シルトである。イネと考えられる幅1mm程度の根跡が顯著で、やや淡い色の粘土質シルトで充填された乾痕がみられる。(3)は水田の作土に相当するが、本調査区内ではDC1掘削時にその機能面は失われていた。初生的には静穏な水域で浮遊物質が沈積してきた堆積層であるが、後に水田として利用された。出土遺物はみられなかった。

(4)は黒色を呈し、塊状をなす泥質砂の古土壤である。北隅付近では層厚を増し、やや泥がちになる。出土遺物はみられないが、河内平野全域にわたって分布する弥生時代後期ないしは弥生時代後期~古墳時代初期の亜泥炭層に対比される暗色帶である。(3)に覆われた調査区南半部の(4)上面は当時の地表面(第III造構面)に相当するが、造構はみられなかった。

(5)は灰オリーブ色を呈する塊状の細粒~シルトからなる。後述するDC3から溢れた泥質砂で、(1)上面の第IV造構面を布状に覆う。僅かに弥生土器の破片が出土した。

(6)は浅黄色~にぶい黄色を呈し、トラフ型斜交層理をなす細礫~細粒砂からなる。DC3を完全に埋没させた砂層で、洪水氾濫時に供給されたものと考えられる。僅かに弥生土器の破片が出土した。

(7)は暗緑灰色を呈し、水平層理をなす泥質砂からなる。(6)~(7)にかけて上方粗粒化のサクセッションをなす。植物遺体を多く含み、僅かに弥生土器の破片が出土した。



図9 57-2区遠景。クレーンアームの真下の縱坑が調査地点。背景は生駒山地。

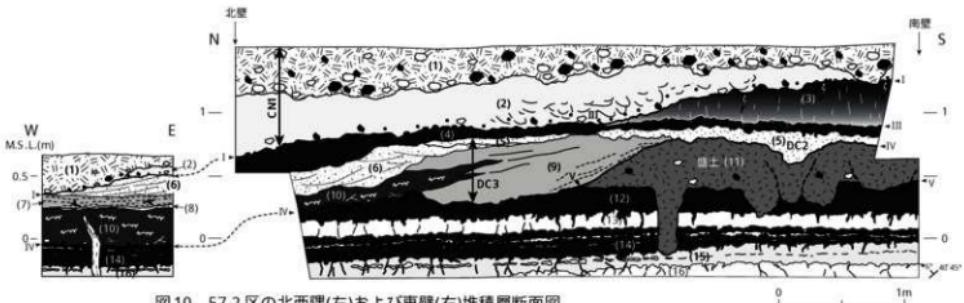


図10 57-2区の北西隅(左)および東壁(右)堆積層断面図



図11 57-2区東壁断面、標高-1.5～-0.5m付近。



図12 57-2区東壁断面、標高0.6～-0.6m付近。

(8)は灰オリーブ色を呈し、水平層理をなす粗粒砂～細粒砂からなる。出土遺物はみられない。

(9)はオリーブ黒色を呈する無層理の粘土質シルトからなる。盛土をなし、DC3の谷壁に相当する(11)の北側斜面に沿って、(11)から崩落した偽礫や砂礫がみられる。(10)と指交する。畿内第II様式後半～同III様式前半の弥生土器が多数出土した。

(10)は黒色を呈する無層理の粘土質シルトからなる。植物遺体を多く含み、畿内第II様式後半～同III様式前半の弥生土器が出土した。また、北壁断面では下位(14)を基盤として上部先端を尖らせた材が打ち込まれていることが確認できた。

(5)～(10)はDC3を充填する堆積層で、造成当初はヒトが投棄した遺物や材とともに閉塞された静穏な滞水域で浮遊物質が沈積し(9)(10)が形成され、後に洪水氾濫時に上流域から運搬された土砂(5)～(8)によってDC3は完全に埋没した。

(11)は黒色を呈する塊状の粘土質シルトからなる。下半は上半に比べてやや泥がちである。拳大～人頭大の斑駁岩の礫、摩耗が顯著な畿内第II様式後半～同III様式前半の弥生土器破片、炭が多く含まれる。盛土を構成する人為的な堆積層で上部に土壤形成が認められる。DC3造成のために(12)(13)を掘削したときに生じた堆土からなり、これら偽礫がみられる。

(12)は黒色を呈する塊状の粘土質シルトの古土壤である。(11)が分布する調査区南半部の(12)上面はDC3および盛土造成直前の機能面(第V遺構面)が保存されており、杭や杭跡、柱穴を検出した。(12)上部からは畿内第II様式後半～同III様式前半の弥生土器破片やサヌカイトの石器剥片が出土した。

(13)は灰色を呈する無層理の粘土質シルトからなる。根跡が顯著に認められる。出土遺物はみられない。

(14)は黒色を呈する無層理の粘土質シルトである。層厚3～4cmの灰青色シルトが断裂しつつも水平方向に分布していることが観察される。57-7区の(10)と層相が一致する。出土遺物はみられない。

(15)は灰色を呈する無層理の粘土質シルトである。出土遺物はみられない。東壁断面北半では(14)と同様に灰青色シルトが見かけ上、断裂しつつも水平方向に分布していることが観察される。下位層準へ発達した根跡が顕著である。断裂しつつ水平方向に分布する灰青色シルトは、もともとは水平方向に連続するシルトの単層で、地下茎や根の発達によって分断された可能性が伺える。(15)の走向はN40°~45°E、傾斜は4°NWで、(11)を不整合に覆う。

(16)は緑灰色を呈する粘土質シルトと細粒砂～極細粒砂の葉層の互層からなり、根跡がみられる。出土遺物はみられない。

3.2.2. 遺構と遺物

本調査区では上位より第I, III, IV, V 遺構面の合計4面を検出した。第I遺構面は57-3区の水田作土の機能面として検出した第II遺構面に対応するが、本調査区ではCN1下面で加工面として検出した。同面で検出した遺構はCN1のほか、DC1を検出した。第III遺構面は盛土下面で機能面として、CN1下面で加工面として検出した。遺構はみられなかったが、盛土下面の機能面は弥生時代後期～古墳時代初頭頃の地表面として認定できる。第IV遺構面はDC2とDC2掘削時の排水からなる盛土、盛土上面に形成されたDC3を検出した。第V遺構面では柱穴、多数の杭や杭跡を検出した。以下、第I, IV, V 遺構面で検出した遺構および遺構内で出土した遺物について記述する。

[第I遺構面] (図13,14)

CN1 調査区外に拡がる幅5.2m以上、深さ1.3m以上の溝である。堀上田に伴う比較的規模が大きい井路と考えられる。走向はN84°E、傾斜はおおむね8°Nで東西方向の井路である。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器の細片、瓦の破片が出土した。最新遺物は近世の瓦で、同時期以降の井路と考えられる。

DC1 調査区西端で検出した幅25cm以上、深さ30cm以上の溝である(図15)。上部はCN1に削平されている。

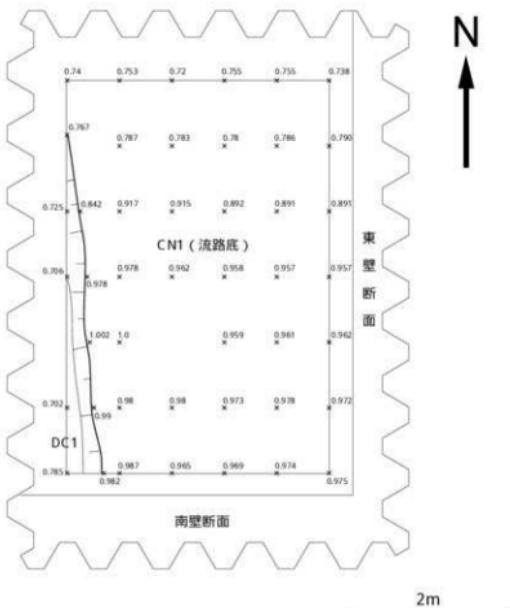


図13 57-2区第I遺構面で検出した遺構、数値は標高を示す(単位m)。



図14 57-2区第I遺構面全景、南西より。



図15 DC1完掘状況、東より。

出土遺物はみられない。

[第IV 遺構面](図16,17)

DC2 盛土上面で検出した。調査区中央東隅からDC3に向かって弧状に延びる。幅20~30cm、深さ20cmを測る。DC3から溢れ、盛土上面を布状に覆う(5)によって充填されている。弥生土器中期の土器片やサヌカイトの石器剥片が出土した。

DC3 調査区北半で検出した盛土の肩からの幅4m以上、盛土上面からの深さ90cm以上の溝である。東南東—西南西方向に延びる。南側谷壁には幅約1.5mの平坦面をもち、さらに北北西に向かって底が深くなる。調査区内ではDC3南肩のみを検出しただけで、北肩は調査区の北側にあると考えられる。DC3を充填する堆積層は下部の泥層(9)(10)と上部の砂層(5)~(8)に大別され、静穏な滞水域であった溝が洪水氾濫によってたらされた土砂によって埋没

したことがわかる。また、調査区北西隅のDC3底部には(14)を基盤として上部先端を尖らせた材が打ち込まれていることが確認できた(図19)。

出土遺物については上部から僅かに弥生土器の破片が、下部から多数の畿内第II様式後半~同III様式前半の弥生土器、木製品、長軸10~30cmの斑縞岩や花崗岩、僅かにサヌカイトの剥片が出土した(図20~25)。



図17 第IV遺構面で検出したDC2(右)およびDC3(左)。DC3は充填堆積層の上半を除去したところ。



図18 DC3の肩付近で出土した細頸壺(8)



図19 DC3の底に打ち込まれていた材。北壁断面。

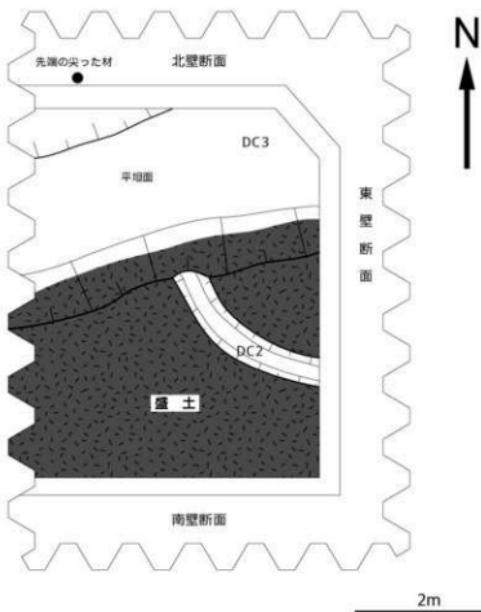


図16 57-2区第IV遺構面で検出した遺構、主として弥生時代中期(畿内第III様式期)の溝(DC3)とその排土を積み上げた盛土からなる。DC3の底には上部先端を尖らせた材が打ち込まれていることが確認された。

08は長頭壺の口縁～頸部で、口径 17.45cm、頸部最短径 9.0cm、残存長 13.3cmを測る。僅かに垂下する口縁の端面には櫛描籠状文が施され、頸部外面はナナメ方向のハケ目がナデによって消され、さらに 4 条の櫛描直線文が施されている。内面は不定方向のハケ目が部分的にナデ消され、口縁内面には僅かにミガキや工具痕がみられ、円形浮文が施されている。全体的に調整は粗雑である。胎土の色調は灰黄色～暗灰黄色を呈し、斑駁岩起源の粗い角閃石や長石がみられる。弥生時代畿内第 III 様式期に属する。

09は高杯もしくは台付鉢の中実の脚部で、底部口径 12.8cm、残存長 12.8cmを測る。裾端は僅かに外に開きながら立ち上がる。脚の外面はタテ方向のヘラミガキが、裾外面はハケ目がヨコナデによって消されている。底部内面はハケのちヨコナデおよび不定方向ナデが施されている。胎土の色調はにぶい黄橙色を呈し、長石や雲母がみられる。弥生時代畿内第 III 様式期に属する。

10は壺の口縁～頸部で、推定口径 19.4cm、残存長 7.2cmである。工具痕が内面にみられるが、加飾はなく、全体をナデで仕上げている。表面の風化がすすみ、破断面の円磨が著しい。胎土はにぶい橙～橙色を呈し、2mm未満の花崗岩、長石、石英がみられる。弥生時代畿内第 II 様式期後半に属する。

11は壺の口縁部で、推定口径 34.4cm、残存長 5.7cmを測る。内面にはヨコ方向のミガキが、外面にはヨコナデのち頸部には櫛描直線文が施されている。また口縁端は断面形状が丸みを帯びた面を有し、頸部とは異なる原体の櫛描直線文がみられ、その上下には刻み目が施されている。破断面の円磨が著しい。にぶい黄橙色を呈し、花崗岩や長石、僅かな斑駁岩がみられる。弥生時代畿内第 II 様式期後半に属する。

12は広口壺の口縁～頸部で、推定口径 20cm、残存長 7.7cmを測る。垂下する口縁をもち、その端面と頸部外面には櫛描直線文が施されている。内面は丁寧なヨコナデが施されている。胎土はにぶい黄褐色～黒褐色を呈し、斑駁岩起源の角閃石や長石が含まれる。弥生時代畿内第 III 様式期に属する。

13は壺の胴部で、2 条の櫛描直線文と半円形まで開いた扇形文が配されている。風化がすすみ、破断面がやや円



図20 DC3出土土器(1)



図21 DC3出土土器(2)

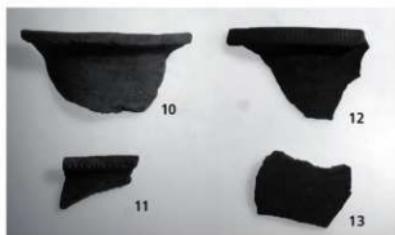


図22 DC3出土土器(3)

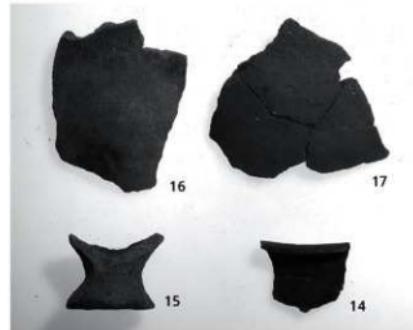


図23 DC3出土土器(4)

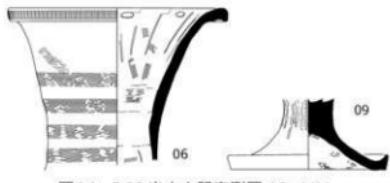


図24 DC3出土土器実測図 (S=1/4)



図25 DC3出土木製品。スケールバーは10cm。

磨している。胎土はにぶい黄褐色を呈し、粗い角閃石や長石が多数含まれる。弥生時代畿内第II様式期後半～III様式期に属する。

14は大和型模の口縁～胴部で、推定口径19.8cm、残存長5.1cmを測る。最大径は胴部にあると考えられる。口縁内面には粗いハケが施され、端部は丸く收められている。胴部外面にはナナメ方向のハケがみられ、煤が付着している。胎土は灰白色を呈し、長石がみられる。弥生時代畿内第II様式期後半に属する。

15は脚の短い中実の高杯脚部で、底径6.4cm、脚部最短径4.2cm、残存長5.2cmを測る。裾内部の断面形状は半球系で、おそらくは椀状の杯をもつタイプと考えられる。表面の風化が進み、破断面の円磨が著しい。胎土は灰色を呈し、斑櫻岩起源の粗い角閃石や長石が多数含まれる。弥生時代畿内第II様式期後半に属する。

16は壺の胴部で、外面上半にはタテ方向のハケのうち4状の櫛描直線文が施されている。内面は不定方向のハケがナデ消されている。表面の風化が進み、破断面の円磨が著しい。胎土はにぶい黄橙色を呈し、0.5mm未満の長石が多数含まれる。弥生時代畿内第III様式期に属する。

17は壺の胴部で、外面上半には3条の櫛描直線文が、下半はヨコ方向のヘラミガキが施されている。内面には指頭圧痕やナデの痕跡がみられる。熱起源と思われる剥離痕が内外面ともにみられ、破断面の円磨が著しい。弥生時代畿内第III様式期に属する。

31はDC3底部に打ち込まれていた杭で、長さ90cm、最大径6.5cmを測る。やや屈曲した材で、枝を切り取って、いっぽうの先端を尖らせたものである。

32は棒状の材の一端を平坦に切り、もういっぽうを凸形に切り出した部材である。両端は焼けて炭化している。長さ26cm、最大径8cmを測る。

33は板材の一部で、端部は刃状に薄く削り出されている。残存長14.3cm、最大幅6.0cm、厚さ最大で1.2cmを測る。

盛土 DC3を掘削した時に生じた排土を盛って造られている。

本調査区南側の57-3区では盛土の継ぎがみられ、盛土の北肩と南肩の距離は約5mで、北肩付近の厚さは40cm、南肩で25cmで南に向かって厚さを減じる。

出土遺物については摩耗が顕著な畿内第II様式後半～同III様式前半の弥生土器破片、拳大～人頭大の斑櫻岩の礫が出土した(図27)。

01は鉢もしくは長頸壺の口縁で、推定口径29.2cm、残存長4.8cmを測る。外面に2条の櫛描直線文が施されている。破断面の円磨が著しい。胎土は暗灰黄色～オリーブ色を呈し、長石や角閃石が多数含まれる。弥生時代畿内第II様式期後半に属する。

02は中空の高杯脚部で、推定底径11.6cm、残存長10.1cmを測る。脚から裾部外面および内面はヨコナデが施され、脚部外面はタテ方向のヘラミガキで仕上げられている。胎土は灰黄色～浅黄色を呈し、比較的細かい長石や雲母が含まれている。弥生時代畿内第III様式期に属する。

04は広口壺の口縁～頸部で、推定口径12.8cm、残存長6.0cmを測る。垂下する口縁をもち、その端面には櫛描波状文が、その下端には刻み目が施されている。頸部外面はハケ調整のち丁寧にナデ消され、櫛描直線文が施され

ている。内面は頭部から口縁部にかけてヨコナデのち、タテ方向のヘラミガキが施されている。胎土は暗灰黄色を呈し、斑臘岩起源の角閃石や長石が含まれている。弥生時代畿内第III様式期に属する。

[第V 遺構面] (図26)

(4)上半 (4)上半部での土壤形成の過程で混入した土器片が僅かにみられた (図27)。

03は甌の口縁部で、推定口径22.8cm、残存長7.6cmを測る。外面はナナメ方向のハケが施されたのち、外側に折り曲げて口縁が作られており、指頭痕がみられる。口径は胴部最大径を上回ると考えられる。胎土は灰黄褐色～にぶい黄褐色を呈し、斑臘岩起源の角閃石や長石が多数含まれる。弥生時代畿内第II様式期に属する。

05は鉢の口縁～胴部で、推定口径29.6cm、残存長10.2cmを測る。口縁から胴部にかけて、比較的強く押圧された櫛描直線文が4条施されている。胴部外面には粗いヘラミガキが、内面にはヨコナデがみられる。胎土は灰黄褐色～にぶい黄褐色を呈し、長石や角閃石が多数含まれる。弥生時代畿内第II様式期に属する。

PT1 調査区南端で検出した。長軸58cm、それに直交する短軸39cm、深さ37cmの楕円形の平面形態をなす。堀形とは別に20×25cmの柱穴をもち、全体の縦断面形は下に凸の形状をなす (図30)。遺構内は泥で充填されており、堀形からは甌の上半部の破片(06)が押し潰された状態で出土し (図29)。柱を抜き取った後に裏が埋められたと判断される。06 (図27,28) は表面の風化や破断面の円磨が顯著で、接合できたのは一部のみであった。推定口径は34.0cm、残存長10cmを測る。胴部内外面にはハケやヘラミガキ調整がみられるものの、口縁の調整は粗雑で指頭痕が残る。胎土にはにぶい橙～橙色を呈し、長石や石英、雲母を含む。確認にかけるがおそらくは弥生時代畿内第II様式期のものだろう。

杭および杭穴群 杭とそれらが打ち込まれていたと考えられる杭穴を計18基検出した (図26,31～36)。杭そのものが打ち込まれた状態で検出したもの、杭がすでになくなり杭穴だけを検出したもの、杭穴を検出し、その内部に木片が遺存していたものがある (図26)。杭2(34)や杭19(38)には他の杭より直徑や横断面の最大幅が大きい材が用いられていることや、基部が粗く削り出されていることから杭と判断した。杭と基盤層の関係を記録できた杭2,8,9のうち、杭2には有機質に富む泥が充填された堀形が確認できたが、杭8,9には堀形がみられず、杭が打ち込まれていたことがわかった。杭列として東北東～西南西方向とそれには

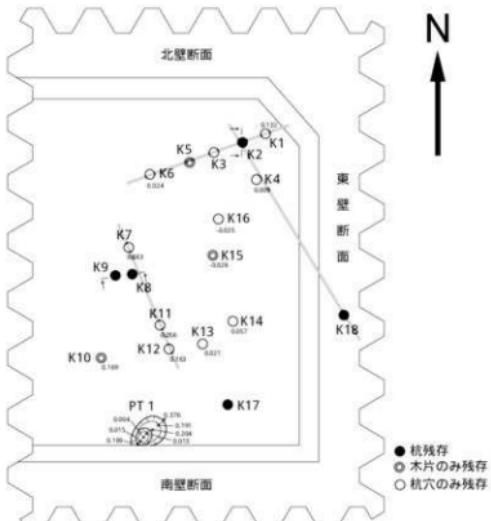


図26 57-2 区第V 遺構面で検出した遺構
弥生時代中期（畿内第II様式期）の杭群と
柱穴からなる。数値は標高を示す（単位m）。

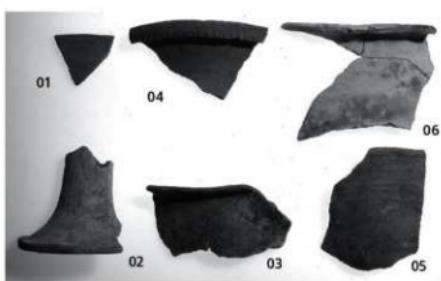


図27 第V 遺構面の(4)上半および遺構から出土した土器



図28 PT1 出土土器実測図 (S=1/4)



図29 PT1でみられた押し潰された土器



図30 PT1完掘状況

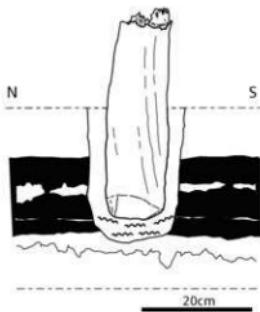


図31 杭2と基盤層断面



図32 杭2立ち割り



図35 杭10検出状況

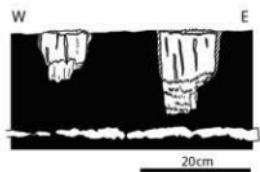


図33 杭9(左)および8(右)と
基盤層



図34 杭8および9立ち割り

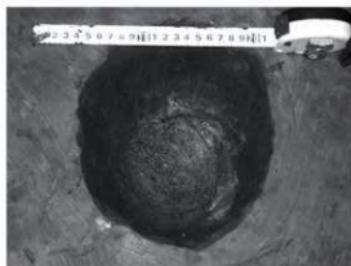


図36 杭15堀形完掘状況、底部に僅かに
材がみられた。

ほぼ直交する北北西—南南東方向の並びがみられる。杭穴からはごく稀に土器片が出土したが時期決定には至らない。

34(杭2)は最大径13.5cm、残存長42cmを測る。下端には粗く削り出された痕跡がみられ、もう一端は欠損している(図37)。

35(杭8)は最大径9.5cm、残存長13cmを測る。下端は材の長軸に対して40~45°の方向に切断されて尖っている。もう一端は欠損している(図40)。

36(杭9)は最大径7.5cm、残存長9cmを測る。下端は風化が著しく、削り出された痕跡が不明瞭で、もう一端は欠損している(図41)。

37(杭17)は最大径12cm、残存長21cmを測る。下端には粗く削り出された痕跡がみられ、もう一端は欠損している(図38)。



図37 第V面出土杭材(杭2)と
その先端部



図38 第V面出土杭材(杭17)と
その先端部

図39 第V面出土杭材(杭19)

図40 第V面出土杭材(杭8)

図41 第V面出土杭材(杭9)

38(杭19)は断面が16×11.5cmの扁平な形状をもち、残存長51cmを測る。下端には粗く削り出された痕跡がみられ、もう一端は欠損している(図39)。

なお、これらの杭やDC3から出土した材については樹種同定を行っていない。

以上より、第V遺構面で検出した遺構や同面を形成した遺物包含層(4)上半)からは弥生時代畿内第II様式期の土器が、第IV遺構面では弥生時代畿内第II様式期後半~III様式期の土器が出土したことがわかる。第IV遺構面の遺構は下位の第V遺構面の遺構や遺物包含層を破壊して造られているので、古い時期の遺物が混入したと判断され、前者は弥生時代畿内第II様式期に、後者は弥生時代畿内第III様式期に形成されたと推測される。

3.2.3. 放射性炭素年代測定（1）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析では、鬼虎川遺跡第57次調査で採取された堆積物中の植物片と炭化物の放射性炭素年代測定を実施し、年代資料を得る。

1. 試料

試料は、57-2区堆積層中から採取された植物片1点(KTR57#1, Sampling altitude M.S.L.-0.6)と、炭化物1点(KTR57#2, Sampling altitude M.S.L.-3.5)の計2点である。

2. 分析方法

測定は、試料のAAA(酸—アルカリ—酸)化学処理を施した後、グラファイトを作成し、加速器質量分析機を用いて実施した。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用した。測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4を用い、いずれの試料も北半球の大気圈における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させた。

3. 結果

測定結果および較正年代を表1,2に示す。なお、KTR57#1については、組織切片のプレバラートを作製し、生物顯微鏡で木材組織を観察したが、木材組織は確認できなかった。よって、KTR57#1は何らかの植物組織ではあるものの、木材ではない可能性が高い。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料番号	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
KTR57#1	植物組織	4330± 40	-25.85± 0.81	4340± 40	IAAA-31341
KTR57#2	炭化物	5080± 40	-27.72± 0.86	5120± 40	IAAA-31342

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2 暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.					
		cal AD	-3,014	-	cal AD	-2,981	cal BP	4,964	-	4,931		
KTR57#1	4330± 40	cal AD	-2,961	-	cal AD	-2,952	cal BP	4,911	-	4,902	0.346	IAAA-31341
		cal AD	-2,929	-	cal AD	-2,888	cal BP	4,879	-	4,838	0.074	
		cal AD	-3,947	-	cal AD	-3,912	cal BP	5,897	-	5,862	0.580	
KTR57#2	5080± 40	cal AD	-3,879	-	cal AD	-3,802	cal BP	5,829	-	5,752	0.299	IAAA-31342
		cal AD	-3,879	-	cal AD	-3,802	cal BP	5,829	-	5,752	0.701	

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4を使用

計算には表に示した丸める前の値を使用している。

付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

3.2.4. 放射性炭素年代測定（2）

別所秀高・影山陽子(関西大学・院)・木庭元晴(関西大学)

鬼虎川遺跡第57次発掘調査57-2区のDC3で採取した材(試料番号yayoi037)についてベンゼン—液体シンチレーション法による放射性炭素年代測定を行った。測定した材には弥生時代畿内第II~III様式期の土器が供伴していた。本実験で使用した機器は、関西大学年代測定室に設置されているベンゼン合成装置および液体シンチレーションカウンター(LKB-ワラック社製QuantulusTM1220)を使用した。実験過程は網干ほか(1999), Koba(2000), 木庭ほか(2000a), 木庭ほか(2000b), 木庭ほか(2004)に準拠し、試料前処理、Li₂C₂合成、C₂H₂合成、C₆H₆合成、液体シンチレーション計測、年代計算の順に行った。なお、安定同位体は測定していないため、 $\delta^{13}\text{C}$ には既定値-24±

2.0‰を使用して放射年代を求めた。また、較正年代は Stuiver et al. (1998) のデータセットを参照するキャリブレーションプログラム CALIB rev.4.3 (for Macintosh) を使って算出した。以上で得られた放射性炭素年代測定結果および較正年代を表 3 に、確率分布図を図 42 に、放射年代と較正年代の関係を表す較正曲線を図 43 に、CALIB から得られたテキスト情報を図 44 に示す。

本実験で得られた放射年代は ca. 2500BP、較正年代は Method B の $\pm 1\sigma$ で ca. 760 - 510cal BP である。この較正年代は畿内第 II - III 様式期の伝統的な実年代觀に比べて古い。これは奥村(1995)や今村(2001)が指摘されているように 760 - 410BC の間は較正曲線がほぼ横ばいの状態で(図 43)、 ^{14}C 濃度の経年による低減が顕著ではないことにによる。つまり、2400 - 2550BP の放射年代を曆年に較正するのは困難であるといえる。精度は劣るが、Method A $\pm 2\sigma$ での 829 - 264cal BC あるいは Method B $\pm 2\sigma$ の 825 - 384 cal BC で測定試料の年代を捉える必要があるだろう。

表 3 放射性炭素年代測定結果および較正年代

コート番号	試料番号	放射年代 (SP)	較正年代 (cal BC)	相対比	試料の種類	採取地點	採取場所	供体土器形式	採取地経緯度	採泥者
KU-0059	yay037	2478 +/- 108	763 - 676	0.311	材	鬼虎川遺跡57-2区	DC3	御生三・III様式	34.40, 46N / 135.38, 10E	東大阪市文化財協会
			674 - 510	0.584						
			485 - 485	0.003						
			462 - 451	0.041						
			439 - 428	0.037						
			421 - 414	0.024						

*安定炭素同位体比は規定値の-24‰を用いて算出した年代値

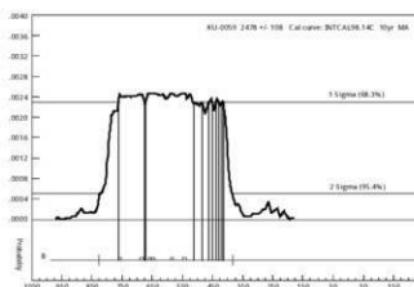


図 42 較正年代の確率分布

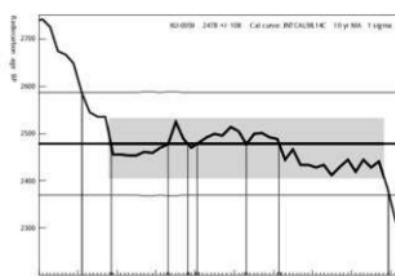


図 43 放射年代と較正年代の関係を表す較正曲線。網点部は ^{14}C 濃度の顕著な低減がみられない領域。

図 44 CALIB による計算結果、一部省略。

UNIVERSITY OF WASHINGTON QUATERNARY ISOTOPE LAB RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM REV. 4.3

based on Stuiver, M. and Reimer, P.J., 1993, Radiocarbon, 35, p. 215-230.

#KU-0059
#Radiocarbon Age BP = 2478 +/- 108
Reference (Stuiver et al., 1998a)
Calibrated age(s) cal BC 758, 685, 659, 647, 585, 585, 543
cal BP 2707, 2634, 2608, 2596, 2534, 2534, 2492
Delta 14C per mil: 19.3, 10.3, 7.2, 5.7, -1.8, -6.9
cal AD/B/C (cal BP) age ranges obtained from intercepts (Method A):
oneSigma** cal BC 795 - 403 (2744 - 2352)
twoSigma** cal BC 829 - 377 (2778 - 2326)
266 - 264 (2215 - 2213)
Summary of above:
maximum of cal age ranges (cal ages) minimum of cal age ranges:
1 sigma cal BC 795 (758, 685, 659, 647, 585, 585, 543) 403
cal BP 2745 (2707, 2634, 2608, 2596, 2534, 2534, 2492) 2353
2 sigma cal BC 829 (758, 685, 659, 647, 585, 585, 543) 264
cal BP 2779 (2707, 2634, 2608, 2596, 2534, 2534, 2492) 2214

cal AD/B/C & cal BP age ranges (cal ages) as above
from probability distribution (Method B):
area enclosed: cal BC (cal BP) age ranges relative area under
probability distribution
68.3 (1 sigma) cal BC 763 - 676 (2712 - 2625) 0.311
674 - 510 (2623 - 2459) 0.584
485 - 485 (2434 - 2434) 0.003
462 - 451 (2411 - 2400) 0.041
439 - 428 (2388 - 2377) 0.037
421 - 414 (2370 - 2363) 0.024
95.4 (2 sigma) cal BC 825 - 384 (2774 - 2333) 1.000

References for calibration datasets:
Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W.,
Bur, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G.,
v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998a).
Radiocarbon 40:1041-1083.
Original dataset:
Stuiver, M. and Braziunas, T.F. (1993) The Holocene
3:289-305.
Revised dataset:

Comments:
* This standard deviation (error) includes a lab error multiplier.
** 1 sigma = square root of (sample std. dev.^2 + curve std. dev.^2)
* 2 sigma = 2 x square root of (sample std. dev.^2 + curve std. dev.^2)
where ^2 = quantity squared.
[] = calibrated with an uncertain region or a linear
extension to the calibration on curve
0* represents a "negative" age BP
1955* denotes influence of nuclear testing C-14

NOTE: Cal ages and ranges are rounded to the nearest year which
may be too precise in many instances. Users are advised to
round results to the nearest 10 yr for samples with standard
deviation in the radiocarbon age greater than 50 yr.

3.3. 57-3 調査区の堆積層と出土遺物

57-3区は約46m²(5.6×8.3m)の立坑で、標高約1.4～-0.6mが調査対象である。地盤高6.3mより1.4mまでの堆積層を機会掘削で除去し、それ以下、-0.6mまでの堆積層を人力で掘削した。しかしながら調査の過程で本調査区は先に実施された鬼虎川遺跡第44次発掘調査地点の調査範囲と大半が重複していることが判明し、標高1.4m付近で平面の精査を実施したところ、西壁沿いに幅70cm、北壁沿いに幅20cmの範囲のみで堆積層が保存されていることを確認した(図45)。このため、平面での遺構検出を断念し、堆積層の記載と、各層準ごとに遺物を採取することに留めた。

(1)は灰オリーブ色を呈し、上方粗粒化のサクセションをなす砂泥互層である。とくに上部には細粒砂～極細粒砂の葉層が顯著で、踏み込みによってできた下に凸の形状が部分的にみられる。また、まれにカレントリップル葉理が観察される。出土遺物はみられなかった。

(2)は灰色を呈する無層理の粘土質シルトである。イネと考えられる幅1mm程度の根跡が顯著で、やや淡い色の粘土質シルトで充填された乾痕がみられる。初生的には静穏な水域で浮遊物質が沈積してできた堆積層であるが、後に水田として利用された。57-2区とは異なり上面は浸食されておらず、機能面が保存されていた(第II遺構面)。57-2区の(3)に対比される。出土遺物はみられなかった。

(3)は黒色を呈し、塊状をなす泥質砂の古土壤である。南側にかけて層厚を増し、やや泥がちになる。出土遺物はみられないが、河内平野全域にわたって分布する弥生時代後期ないしは弥生時代後期～古墳時代初頭の亜泥炭層に対比される暗色帶である。57-2区の(4)に対比され、上面は第III遺構面に対応する。出土遺物はみられなかった。

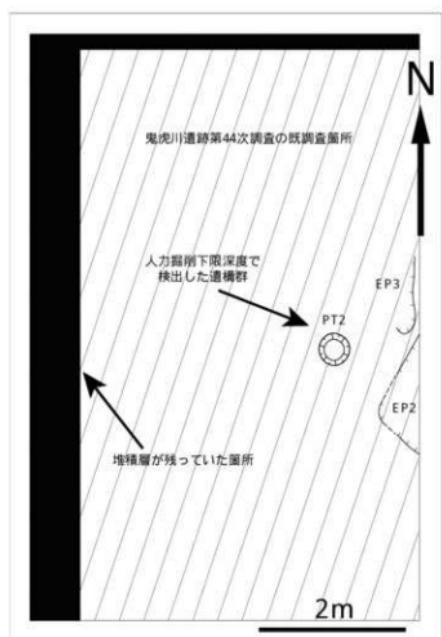


図45 57-3区で確認した52次調査による既に破壊部と人力掘削下限深度で検出した遺構



図46 57-3区西壁断面・標高1.4～0.9m付近。



図47 57-3区西壁南半部断面・標高0.9～-0.8m付近。

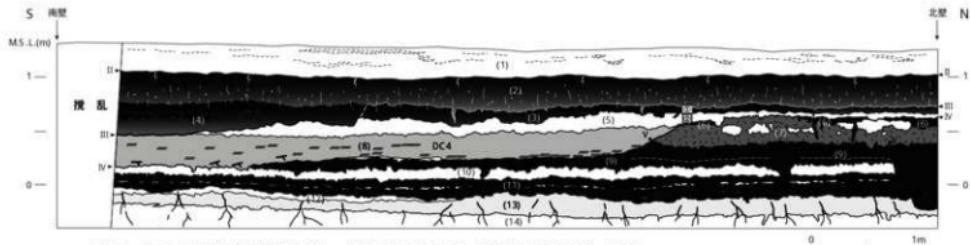


図48 57-3区西壁堆積層断面図。丸数字は図49,50の薄片試料番号に対応。

(4)は黒色を呈する無層理の粘土質シルトである。南端付近のみに分布する。出土遺物はみられなかった。

(5)は灰色～オリーブ灰色を呈する無層理の粘土質シルトである。盛土上部付近では細粒砂～極細粒砂の葉層が挟まり、葉層は南に向かって薄層化・せん滅する。57-2区の(5)と同時異相をなし、給源の57-2区 DC3から離れるに従って細粒化する。出土遺物はみられなかった。本層は鬼虎川遺跡の弥生時代中期の居住域とされる外環状線（国道170号線）より西側に広く分布し、畿内第IV様式期の堆積層や遺構を覆っていることから（例えば第7次調査地点の第10～11層（那須ほか1984）、第47次調査地点の第V層（金村2001）など）、この洪水氾濫を契機に集落の移動を余儀なくされたのではないかと考えられる。なお、(2)、(3)、(5)にまたがる層準で不擾乱の堆積物を探取し、薄片を作成した（図49,50）。これらの記載や解釈については後日詳述したい。

(6)は(7)の盛土上面にのみ分布する、黒色で塊状をなす泥質砂の古土壤である。盛土上面の古土壤は洪水氾濫時に大部分が浸食されたと考えられ、57-2区にはみられない。出土遺物はみられなかった。

(7)は黒色を呈する塊状の粘土質シルトからなり、盛土を構成する人為的な堆積層である。DC4造成のために(9)

(10)を掘削したときに生じた排土からなり、これらの層準の偽礫が顕著にみられる。また、57-2の盛土と比べて、偽礫が大きく新鮮である。畿内第II様式後半～同IV様式の弥生土器破片、炭が多く含まれる（図51～55）。

18は鉢の口縁～胴部で、推定口径29cm、残存長6.5cmを測る。口縁端部は垂下し、胴部外面には3条の櫛描筆状文が施されている。内面はヨコ方向のヘラミガキが丁寧に施されている。表面の風化が進み、破断面の円磨が著しい。胎土は黄灰色を呈し、斑模岩起源の角閃石や長石が多数含まれる。弥生時代畿内第III様式期に属する。

19は広口壺の口縁～頸部で、推定口径26.4cm、残存長は4.3cmを測る。口縁端部は僅かに垂下し、端面には櫛描波状文、下端には刻み目が施されている。頸部外面には櫛描直線文の痕跡がみられる。破断面の円磨が著しい。胎土は黄灰色を呈し、角閃石や長石が含まれる。弥生時代畿内第III様式期に属する。

20は甕の口縁～頸部で、推定口径16.2cm、残存長5.6cmを測る。口縁端部は肥厚化し、内側に傾く端面をもつ。内外面ともにヨコナデ調整が施されている。破断面の円磨が著しい。胎土は灰白～灰黄色を呈し、長石や雲母、チャートが含まれる。弥生時代畿内第III様式後半～IV様式期前半に属する。



図49 No.1薄片、薄片上部は(3)最下部、中・下部は(5)に相当する。層界は明瞭で全体的に泥勝ちである。表面が滑らかで、直立した根跡や0.5mm以下の炭化物が顕著にみられる。



図50 No.2薄片(6)に相当する。壁面はジグザグ形で比較的大きな空隙が多い。幅0.2mm程度の間隙で全体が亀甲状に割れている。直径数mm程度の粒団状の塊や1mm以下の炭化物が密に分布している。

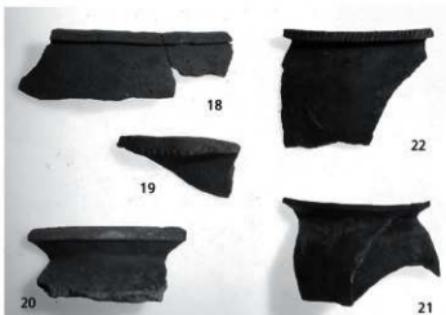


図51 盛土内出土土器(1)



図52 盛土内出土土器(2)



図53 盛土内出土土器(3)



図56 DC4出土土器(2)

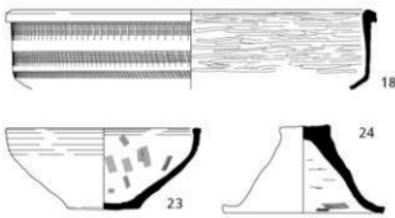


図54 盛土内出土土器実測図 (S=1/4)



図55 DC4出土土器(1)

21は楕の口縁～頸部で、推定口径12.8cm、残存長7.8cmを測る。口縁部付近は丁寧なヨコナデが施され、外面は工具もしくはハケの痕跡がみられる。外面には煤が付着している。胎土は暗灰黄色～オリーブ褐色を呈し、斑鳩岩起源の角閃石や長石が多数含まれる。弥生時代畿内第III様式～IV様式期に属する。

22は楕の口縁～頸部で、推定口径28.0cm、残存長9.9cmを測る。口縁端部はやや肥厚化し、内側に傾く端面には刻み目がみられる。外面はタテ方向のヘラミガキが密に施され、口縁内面はヨコ方向の丁寧なハケ調整が施されている。外面には煤が付着している。胎土は暗灰黄色～黒褐色を呈し、斑鳩岩起源の角閃石や長石が多数含まれる。弥生時代畿内第III様式後半～IV様式期に属する。

23は鉢で、口径16.0cm、高さ7.6cm、推定定径5.8cmを測る。口縁外面には4状の凹線がみられ、胴部から底部外面にかけては、強い押圧で工具によって砂粒が引きずられた痕跡がみられる。内面には弱いハケ調整が施されている。胎土はにぶい黄褐色を呈し、細かな長石が多数含まれる。弥生時代畿内第IV様式期に属する。

24は蓋で、頂部径3.8cm、底径13.0cm、高さ7.2cmを測る。裾部内面にはハケメがみられ、頂部は押圧によってつまみ出されている。裾部内面には煤の付着が著しい。胎土はにぶい黄橙色を呈し、角閃石や長石が多数含まれる。弥生時代中期の所産と考えられる。

以上より、本調査区の盛土造成は弥生時代畿内第IV様式期で、57-2区の盛土に比べて新しい。两者の前後関係に



図57 57-3区人力掘削下限深度で検出したPT2



図58 EP2出土土器

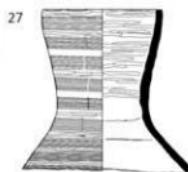


図59 EP2出土土器実測図(5=1/4)

については現地での層序学的な確認を怠ったが、まず同III様式期にDC3の掘削に伴って盛土を造成し、その後同IV様式期のDC4掘削時にもとの盛土の南側にさらに盛土を付加し、拡幅したと考えられる。

(8)は黒褐色を呈する無層理の有機質に富んだ粘土質シルトで、材や炭を多く含み、畿内第III様式～同IV様式の弥生土器破片が供伴した。DC4を充填している。静穏な潜水域の堆積環境を示し、そこに人によって遺物や炭、材が廃棄されたことが伺える。DC4の谷壁に相当する盛土の南側斜面に沿って、(7)から崩落した偽礫や砂礫がみられる。また、本調査区西側断面の中央部より南側では層相とは無関係に、標高0.3～0.6m付近に藍鉄鉱が析出していることが確認できた。(6)(7)上面および(8)下面は第IV遺構面に対応する。

25は楕の口縁～頸部で、推定口径29.0cm、残存長8.1cmを測る。口縁外面はヨコナデのちタテ方向のヘラミガキが密に施されている。口縁内面はヨコ方向のヘラミガキが、胴部内面は粗いヘラミガキが施されている。破断面の円磨が著しい。胎土は灰白色を呈し、長石、石英、クサリ礫が多く含む。弥生時代畿内第III様式～IV様式期に属する(図55)。

26は球形の胴部をもつ壺の頸～胴部で、推定胴部最大径約32cm、残存長約24cmを測る。胴部の肩には櫛描波状文とその上に4状の櫛描直線文が施されている。内面は全体的にハケの痕跡がみられ、部分的にナデ消されている。弥生時代畿内第IV様式期に属する(図56)。

(9)は黒色を呈する塊状の粘土質シルトの古土壤である。(7)が分布する調査区北端の(9)上面はDC4および盛土造成直前の機能面(第V遺構面)が保存されており、西壁断面では(9)上面で形成された杭穴や遺構を確認することができた。57-2区の(12)に対比される。(9)上部からは僅かに弥生時代中期の土器破片が出土した。

(10)は灰色を呈する無層理の粘土質シルトからなる。根跡が顕著に認められる。出土遺物はみられない。57-2区の(13)に対比される。

(11)は黒色を呈する無層理の粘土質シルトである。層厚3～4cmの灰青色シルトが断裂しつつも水平方向に分布していることが観察される。57-2区の(13)に対比される。出土遺物はみられない。

(12)は緑灰色を呈する無層理の粘土質シルトである。根跡が顕著にみられる。出土遺物はみられない。

(13)は灰色を呈する無層理の粘土質シルトである。下位層準へ発達した根跡が顕著である。57-2区の(15)に対比される。出土遺物はみられない。

(14)は緑灰色を呈する粘土質シルトと細粒砂～極細粒砂の葉層の互層からなり、根跡がみられる。57-2区の(16)に対比される。出土遺物はみられない。

いっぽう、人力掘削下限深度では先の44次発掘調査では認知されなかった遺構を確認することができた(図45,57)。これらの遺構がどの遺構面で形成されたものなのかは判断できない。

PT2 直径約41cmの円形の柱穴で、深さ約10.5cmを測る(図57)。出土遺物はみられなかった。

EP2 おそらくは隅丸方形の土坑で、調査地中央部東隅で検出した。弥生土器の破片が散見されたほか、下半部が欠損した細頭壺(27)が出土した。

27は細頭壺で、口径9.7cm、残存長13.5cmを測る。口縁部上端はごく僅かに内湾しながら立ち上がる。頭部上端から胴部にかけて連続的に9状の郴描直線文が施されている。口縁～頸部内面には丁寧なヨコ方向のヘラミガキが施されている。口縁端部には3力所に打ち欠きがみられ、下半部は意図的に破壊されているようにみえる。供献土器の可能性が考えられる。胎土は黒褐色～灰黄色を呈し、細かい長石やクサリ礫が多く含む。弥生時代畿内第II様式期末に属する（図58,59）。

EP3 溝状の遺構で、調査地中央部東隅で検出した。ごく僅かに弥生土器の破片が出土した。

参考文献

- 網干善教・木庭元晴・小元久仁夫・佐々木修一・貝柄 繁・岩田央之・辻 康男, 1999, 関西大学のベンゼン—液体シンチレーション法による放射性炭素年代測定法I, 関西大学博物館紀要, N0.5, pp.1-30.
- 生駒山地領家帯研究グループ 1986 生駒山はんれい岩体について, 地球科学, 40, pp.102-114.
- 池崎智詞・藤城 泰, 2000, 鬼虎川遺跡第42次発掘調査報告—一般国道170号線他42次発掘調査報告一, 財団法人東大阪市文化財協会, 今村謙雄, 2001, 織文～弥生時代移行期の年代を考える一問題と展望, 第四回研究, 40(6), pp.509-516.
- 芋本隆裕・松田順一郎, 1984, 鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3—遺構編一, 財団法人東大阪市文化財協会.
- 奥村晃史, 1995, 「C年代の補正と高精度化のための手法」, 第四回研究, 34(4), pp.191-194.
- 樋山彦太郎・市原 実, 1972, 大阪平野の発達史—¹⁴C年代データからみた—, 地質学論集, 7, pp.101-112.
- 勝田邦夫・曾我恭子, 1994, 西ノ辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書, 財団法人東大阪市文化財協会.
- 木庭元晴・網干善教・米田文孝・水田真次郎・別所秀高・貝柄 繁・影山陽子・藤井 譲, 2000a, 関西大学のベンゼン—液体シンチレーション法による放射性炭素年代測定法II: 新しいリチウム反応槽を使ったカーバイドの合成, 史泉(関西大学史学・地理学会), No.29, pp.34-53.
- 木庭元晴・網干善教・米田文孝, 2000b, 関西大学のベンゼン—液体シンチレーション法による放射性炭素年代測定法III: 液体シンチレーション計測の実際, 関西大学文学論集, Vol.50, No.2, pp.97-127.
- 木庭元晴・網干善教・米田文孝, 2004, 関西大学のベンゼン—液体シンチレーション法による放射性炭素年代測定法IV: 放射性炭素年代の計算過程とその較正年代への変換, 関西大学考古学研究室開設50周年記念論叢(印刷中).
- 才原弘金・藤城 泰, 1996, 鬼虎川遺跡第33次発掘調査報告, 財団法人東大阪市文化財協会.
- 寒川 旭・宮地良典, 2001, VI.段丘及び段丘堆積物・大阪東北部地域の地質・地域地質研究報告(5万分の1地形図幅), 地質調査所, pp.64-72.
- 下川浩一・菊屋愛彦・宮地良典・寒川 旭, 1997, 生駒断層系の活断性調査・地質調査所研究資料集N0.303(平成8年度活断層研究調査概要報告書), 105-113.
- 下村晴美, 1988, 鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告, 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会.
- 菅原章太・横原美智子・田之上裕子, 2000, 一般国道170号西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第44次発掘調査報告, 東大阪市教育委員会.
- 菅原章太・坂田典彦・鶴山まり・若松博惠・松田留美・瀬戸哲也・島田 拓, 2002, 一般国道170号西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第52次発掘調査報告, 東大阪市教育委員会.
- 地学団体研究会大阪支部編著, 1999, 大地のおいたち—神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類, 築地書館, 224p.
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会編, 1987, 日本の地質6 : 近畿地方, 共立出版, 297p.
- 原田 修・若松博惠・曾我恭子, 1998, 水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告—阪神高速道路水走ランプ建設工事に伴う調査—東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会.
- 別所秀高, 1996a, 宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書—第2分冊—, 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会.
- 別所秀高, 1996b, 布施駅北口駐車場及び寝屋川流域調査建設工事に伴う宮ノ下遺跡第2次発掘調査報告書, 財団法人東大阪市文化財協会.
- 松田順一郎, 1997, 鬼虎川遺跡北部の歴史時代耕作地跡と地表屢序—国道170号線被服団地前交差点立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第38次発掘調査報告一, 財団法人東大阪市文化財協会.
- 松田順一郎, 2000, 鬼虎川遺跡北部の中・近世耕作地跡—浄化槽埋設工事に伴う鬼虎川遺跡第43次発掘調査報告書一, 財団法人東大阪市文化財協会.
- 前田 畏, 1966, 生駒山地の地形と断層線との関係について, 大阪学芸大学報, 14, pp.211-219.
- 宮崎泰史・西口陽一・宮城晴美・瀬川眞美子・市川秀之・森島康雄・浜田延充, 1995, 鬼虎川遺跡26次・西ノ辻遺跡18~20次調査概要報告, 大阪府教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会.
- 若松博惠・阿部嗣治, 2000, 水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告, 財団法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会.
- Kobayashi, M., 2000, Improved results using higher ratios of scintillator solution to benzene in liquid scintillation spectrometry, Radiocarbon, Vol.42, No.2, pp.295-303.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M., 1998, INTCAL98 Radiocarbon age calibration 24,000-0 cal BP, Radiocarbon 40, No.3, pp.1041-1083.

報告書抄録

ふりがな そうすいがんふせつこうじにともなうきとらがわいせきだいごじゅうなな
じはくっくちょうさほうこくしょ

書 名 送水管布設工事に伴う鬼虎川遺跡第57次発掘調査報告書

副 書 名

巻 次

シリーズ名

シリーズ番号

編著者名 別所秀高//パリノ・サーヴェイ株式会社/彌山陽子/木庭元瑞

編集機関 財団法人東大阪市文化財協会 発行機関 財団法人東大阪市文化財協会

発行年月日 2004.03.31 作成法人ID 42710

郵便番号 577-0843 電話番号 06-6736-0346

住 所 東大阪市荒川3-28-21

ふりがな きとらがわいせき 遺跡名 鬼虎川遺跡

ふりがな ひがしおさかし・やよいちょう・にしいしきりちょう

遺跡所在地 東大阪市弥生町・西石切町

市町村コード 27227 遺跡番号 35

北 緯 34.40.48 東 緯 135.38.10 JGD2000

調査期間 2003.07.15 - 2003.03.31 調査面積 262.6m²

調査原因 送水管布設工事

種 別 集落・耕作地跡

主な時代 弥生/近世

遺跡概要 弥生・溝・ピット・杭・弥生土器・石器・木製品/近世・井路・作土層・陶器・磁器・瓦

特記事項 時期不詳の水田作土を検出した。

送水管布設工事に伴う 鬼虎川遺跡第57次発掘調査報告書

発行年月日 2004年3月31日

発 行 財団法人東大阪市文化財協会

印 刷 〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21

株式会社ダイニチ

〒553-0003 大阪市福島区福島5丁目15-13
